

Title	サー・キリアム・ペチイの国富論(上)
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1917
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.11, No.10 (1917. 10) ,p.1291(41)- 1313(63)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19171001-0041">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19171001-0041</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

不磨の憲法を有し、殖民政策に特殊の天才を發揮せる英國人が、必ずや此困難に打勝つて、帝國憲法の改訂に成功するであらうことを信ずるのである。(完)

参考書目 (1) May's Constitutional History of England vol. III. (2) L. Curtis's the Problem of the Commonwealth (3) The Round Table, March and June numbers (4) Nineteenth Century and After, July number (5) Lowell's the Government of England, vol. II (6) Fortnightly Review, August number. (7) The Times.

### サー・井リアム・ペチの國富論 (上)

高橋誠一郎

「數年以前、經濟學は之を科學と做すを妥當とするや、或は技術と看做す可きものなりや、換言すれば、そは先づ富の生産及び分配が據りて以て行はる可き諸原則の科學的研究に従事す可きものなりや、或は其の主たる目的は富の生産を増加し、而して其の分配を改善す可き實際的提案を爲すに在りや如何に就きて幾多の論争ありき。十七世紀の論客は全然後の見地よりして經濟問題に接近したるものにして、當時に於ける論篇の大多數は或る一定の提議を擁護しつゝありし人々、並に其の抱懐せる特殊の畫策の爲めに一般的理論を舉示したる人々の筆に成りしものなることを記憶するを必要とす。假令、其の然らざる場合と雖も、彼等の努力は、他の提議を批評するに當りても、又は事實を蒐集するに際しても、確然且つ意識的に賢明なる國家統治の大業に補助的救済を與ふるものと思惟せられしなり。貨

幣改鑄の難問題に關し、聰明なる助言を與へんとするの希望よりして、鑄貨及び貨幣に關する諸般の論争を喚起せり。全般の問題は Petty, Locke 及び Child によりても亦、さまで顯著ならざる論者によると等しく、其の實際的方面に於て論述せられたり。當時の論者が之と異れる精神を以て經濟問題を論じたる場合には、彼れ等は科學的正確を主張するよりも、寧ろ幾多の「無可有郷」に於て (Utopias に於て、又 Argobas に於て、而して更に Oceanas に於て) 假作的に是等を論じたるなり。是等の人々が多數の錯綜せる事件に關し記述するに當りて示せる感嘆す可き常識を十分に諒知せる讀者と雖も、尙ほ Adam Smith の學徒等によりて行はれたる更に純然たる科學的研究の以後に於て始めて可能と爲れる思想の明晰、及び連續的推理の缺如たるを遺憾とするなる可し。こは洵に免れ難き所にして、富の現象が他が社會現象より細心なる注意を以て離隔せらるゝまでは精確に彼れ等を論ずること可能ならざりしなり。十七世紀の經濟論者は彼れ等が抱懷せる目的に對して餘りに銳意にして、彼れ等は之に到達する手段の上に十分に注意を集中することなかりしなり。彼れ等の筆跡は犀利なる言説を以て充たされたり。而して彼れ等の多

くは巧妙なる方法を以て特殊の題目を論じたり。然れども彼れ等が是等特殊の諸論點に對して割り當てたる面積には奇異なる不權衡を有したり。而して彼れ等は其の主題の範圍に關し、若しくは吾人が思想の習性に從ひてそが當然到達す可き區分に關しては何等明確なる概念を有せざりしが如し。斯くて當時の最も銳利なる著者の手に成れる書中には、正しく彼れ等が頗る多くの點に於て Adam Smith の先蹤を爲せりと稱揚せられ得可き時に於てすら尙ほ混亂の觀あるを免れざるなり。

「更に其の主題の範圍が仍ほ頗る不確定なりし他の徵證は經濟學が未だ一個の名稱の權威を取得することなかりし事實に存す。Perry は此の點に於て一步を進めたるものなり、即ち曰く、「賢明なる醫師は寧ろ自然の發動を注意し、而して之に順應し、彼れ等自身の激烈なる療治を以て之に背馳することなく、彼れ等の患者に無用の手術を加ふること少なきが如く、等しく政治學及び經濟學 (Economics) に於ても之と同一の手段を用ひざる可らず」と。Treatise 四十一頁、そは統治の技術、即ち治國策の一部門たるに過ぎざりしなり。歴世の政治家は不知の經濟學者たりしなり。

種々なる方向に民力を伸張せしむるが爲め又は種々なる必要が或る特殊の努力を喚起する毎に諸般の實際的方策は順次に試行せられたり。此の長さ経験の總括的歸結は Elizabeth の法制中に體現せられ而して國力増進の最良方法として意識的に採用せられたり。十七世紀に於ける論者は英國の實驗せる所を以て他の都市並に邦國のそれと比較し、斯くて種々なる社會の現實なる發達若しくは衰微の考察に基礎を有せる更に一般に適用せらる可き箴言を確定するが爲めに忙はしかりき。

「十七世紀に於ける主要なる憲法上の爭議が繋りて歳入の問題に在りし事實は經濟問題をして著しく顯要ならしめたり。而して政治論の記者は最も効果多き課税の形態を論議するに努めたり。負擔を公平に分配し、而して課税の轉嫁を考查するの議も全然等閑視せられたるにあらずと雖も、然も當時の爲政家は主として正しく一定の歳入を取得し得可き財源を發見するに急なりき。此の時代に於ける著作中嶄然として最重要の地位を占むるものは Sir William Petty が Treatise of Taxes and Contributions なる」(W. Cunningham 著 The Growth of English Industry and Commerce

in Modern Times 第一節 The Mercantile System 一千九百〇三年第三版三百八十一—三頁)。

A Treatise of Taxes & Contributions. Shewing the Nature and Measures of Crown-Lands. Assessments. Customs. Poll-Moneys. Lotteries. Benevolence. Penalties. Monopolies. Offices. Tythes. Raising of Coins. Harth-Money. Excize, &c. With several interperst Discourses and Digressions concerning Warrants. The Church. Universities. Rents & Purchases. Usury & Exchange. Banks & Lombards. Registries for Conveyances. Beggars. Ensurance. Exportation of Money. Free-Ports. Coins. Housing. Liberty of Conscience, &c. The same being frequently applied to the present State and Affairs of Ireland. は實に Sir William Petty が經濟論中最も夙く成れるものにして、且つ最も秩序整然たるものなり。當時英國に於て公にせられたる財政論の散漫たる性質を記憶するものは、彼れが本問題に對する理解の徹底せるに驚かざるを得ず。本書は其第十頁に於て一千六百六十二年一月 (John Lord Roberts に寄せたる献本の手翰に見えたる一月二十五日の日附より、著者が Royal Society に其の五十部を寄附したる二月五日との間) に出版せられたる Captain John Graunt が Natural and Political Observations Mentioned

in a following Index and made upon the Bills of Mortality. の名を掲げ之を以て「近く行はれたる觀察」と稱したると、Sir Robert Moray に與へたる書簡に據るに、Petty は同年十月末日前に愛蘭土に在りしを以て、本書は恐らく一千六百六十二年の初めに成りしものなる可し。當時王政復古以後に於ける自己の政治的不安より免れたる Petty は奮然として其の科學的研究に復歸せり(Lord Edmond Fitzmaurice 著 The Life of Sir William Petty 1623-1687. 一千八百九十五年版、百〇四—七頁)。彼が愛蘭土海峡の航行を便ならしむる爲めに「水門船」(Sluice-boat)又は「復船底船」(double bottom)の建造を試みたるも此の時代なり。(同書百〇九—十五頁参照)。彼が本書の外、An apparatus to the history of the common practices of Dying(一千六百六十七年以後數版を重ねたる Tho. Sprat. の The history of the Royal Society of London, For the Improving of Natural knowledge. 中に印刷せらる其の二百八十四頁より三百〇六頁まで) Discourse concerning the Making of Cloth (Thomas Birch の History of the Royal Society 第一卷、一千七百五十六年版、五十五—六十五頁中に Of making cloth with sheeps wool. として掲げられたもの)並に造船に關する論文(一千六百六十五年十一月二十七日、彼が Royal Society に於て發表したる

は其の大體論にして、之が最後の成案は Treatise or Discourse about the Building of Shippes, presented in M. S. to the Royal Society. 中に説明せられたるも、其の稿本は John Aubrey の説く所に據れば、當時同協會の總裁たりし William, Lord Brouncker が「一般に閲讀せしむるには餘りに大なる國家の秘法なり」と云ひて之を拉し去り、一千六百八十二年に至るまで自ら之を所藏したり。而も Petty は彼れに Dr. Robert Wood が彼れ自身と雖も所有せざる其の謄本一部を所有せる旨を談れりと傳へたり。一千八百十三年版 Letters of Eminent Persons. 第二卷、四百九十頁。Anthony a Wood は Petty が一千六百一十二年同協會に送りたる Thoughts on the Philosophy of Shipping は其の死後一千六百九十一年に至りて A Treatise of Naval Philosophy の題下 An account of several New Inventions and Improvements now necessary for England 中に印刷せられたるものにあらざるなきやを疑へり。猶ほ Evelyn の Memoirs 第一卷、三百五十八頁を参照す可し)を著したるも此の時代なり。

此の書出版の精密なる時日は不明なり。本書の序言中に見れたる「彼れ」(Duke of Ormond)の人物に對して最も心を傾けたる議會の開會せらるゝ時云々の辭句を以

て、一千六百六十二年三月四日愛蘭土の下院によりて Ormond に對する三萬磅の贈與を可決せられ (The Political Anatomy of Ireland. 一千六百九十一年版、六十二頁に云々せるものは即ち是なり) 而して彼れが同年四月十九日 Whitehall よりの手簡によりて其の嘉納せられたるを暗示せるものと解すれば、吾人は本書を以て一千六百六十二年五月中に初めて表れたるものと主張せる White Kennett の所言 (Register and Chronicle. 七百〇三頁) を全然信賴するを得可し。若し又、他方に於て等しく本書の序文に見れたる本書の「出生が恰も Duke of Ormond が太守として愛蘭土に出發するに際して起りたる云々の記述に注目する時は其の出版を猶ほ約二ヶ月の後と推定せざる可らず。然れども國王の婚議に困りて七月上旬まで延期せられたる Ormond の赴任は本來四月中行はる可き豫定なりしが如し (Carte 著 Life of the Duke of Ormond. 十一及び二百五十七頁)。斯くて Petty は Ormond が直ちに愛蘭土に向つて出發す可しと豫期したる四月中に曩に引用せる序文を起草し、而して本書が同年五月に出版せられたるものと假定する時は以上兩章句の間に一致を見るを得可し。

本書古版本(十八世紀末まで)にして今日に傳存するもの七種あり。中に就きて著者の生前に上梓せられたるものは四種なり。遮莫、著者が眞に認可したるものは N. Brooke の手に出版せられたる一千六百六十二年の第一版のみなるに似たり。第二版は一千六百六十七年、著者が愛蘭土滞在中、倫敦に於て(出版者は前版と同じく Nath. Brooke なるも、唯だそが従前の Cornhill より Gresham-College に移りたるのみ) 刊行せられたるものなり。Obadiah Blagrove より出でたる一千六百七十九年の第三版は彼れの表白せる希望に反して發行せられたるが如し。即ち彼れが一千六百七十八年五月二十九日 Dublin より Aubrey に答へたる書中に於て “As for the Reprinting the Booke of Taxes I will not meddle with it. I never had thanks for any publick good I ever did, nor doe I owne any such booke” と謂ひ、更に翌年十月五日 Sir Robert Southwell に與へたる書中に於て、再び同書の再版を欲せざる旨を述べたり。同一書肆の手に出版せられたる一千六百八十五年の第四版は表題紙を新たにしたる外、全然前版の再刻にして獨立の典據たるものにあらず。第五は一千六百九十年 A collection of three state tracts の最後に合卷せられたるもの、第六は一千六百八十九年 Edward Poole より

出でたる單行本にして表題紙の外總て一千六百七十九年版の重刻なり。第七は遙に遅れて一千七百六十九年 Dublin の Boulter Grierson より出でたる Tracts; Chiefly relating to Ireland 中に合卷せられたる一千六百七十九年版の重刻なり。生前の各版並に一千六百八十九年版は孰れも皆匿名なり。公然本書の著者を掲げたる嚆矢は J. C. (Josiah Child) が一千六百六十八年の Brief Observations Concerning Trade and the Interest of Money. の追録なる可きか。そは復た Child が New Discourse of Trade. 中に再刻せらる一千六百九十三年版二十六頁無年附第四版二十八頁。本書の手寫本は未だ發見せられたるを聞かず。諸版本中初版は最も確實と思料せらるゝものにして、序文の文辭は本書が著者の承認なくして發兌せられたるものにあらざるを確證するなり。(Charles Henry Hull 編纂 The Economic Writings of Sir William Petty. 第一卷一千八百九十九年版三十四頁參照)。別に Cunningham の所言に據れば A Discourse of Taxes. の題號にて出版せられたる一千六百八十九版ありとなり(前掲 Growth of English Industry and Commerce. 三百八十三頁脚註)。

Treatise of Taxes and Contribution の著は原と王政復古に由りて喚起せられたる財政制度上の大變革に促されて成りしものにして、殊に著者と因縁淺からざりし愛蘭土の國情に照して立論せられ、Petty が興味は主として實際問題の上に存したることと其の書の上に顯然たるものあり。本篇の主題は彼れが最も精通せる事項なり。彼れは公人として財務行政に關する豊かなる經驗を有せり、而して又短見淺慮なる課税制度に由りて齎さる可き重大なる結果を見たり。彼れは劈頭先づ一般の人士に依つて負擔せらる可き諸般の國用を算へて、對外對内の防備、行政、司法、宗教、教育、救貧及び公共の利益を進捗す可き諸般の土木費を列舉し(第一章)次で之が増加膨脹を見るに至りたる數多の原因を考察し、外戰内亂の本原を求めて之を分析し、其中宗教、教育、司法、救貧、土木等特殊の項目に就きて遂行し得可き經費の節減を論じ(第二章)更に課税が十分の効果を擧ぐる能はざる一般的原因を數へて、國家の必要以上に及べる租税賦課、不公平なる徵收、及び寵倖に對する國王の濫給に關する疑念に基く租税支拂の厭惡、及び不便宜なる時機に於ける貨幣支拂の強要、賦課の權能に關する不明疑惑より生ずる人民の抵抗、生産的階級に屬する人民の少數なること、貨幣の稀少、金納の制度より生ずる農民の苦痛並に適當せる經濟統計

の缺乏等を擧げ(第三章)進みて章を分つて收入を擧げ得可き、あらゆる可能なる方法に伴へる利益及び弊害を論述せり(第四章より卷末第十五章に至る)。

然れどもPettの如き厭くまで問題の秘奥を突きて之を窮めんとする者に取りては深く各種の收入を獲得す可き「基本」の問題に向つて穿入することなくして徴税法を論ずるは不可能なる所なり。彼れは此の書の第四十九頁に於て曰く「茲に吾人は「労働が富の父並に發動的元質たること、宛も土地が母たるに等し」と倣せる吾人が主張に因りて、國家は其人員を殺し、傷害し、若しくは禁錮するに由りて等しく已れ自らをも懲罰するものなることを記憶せざる可らず、然れば斯くの如き刑罰は出來得る限り之を回避し、而して労働並に社會の富を増加す可き罰金の刑に變せしむ可きものなり」と。即ち彼れは人間の勤勉及び自然の資源を以て社會の物質的進歩に於ける二個の主要なる要素と觀たるなり。遮莫、斯くの如きはPettが獨自の思想にあらず、將た又時流を抜ける卓見にもあらずして、寧ろ彼れの時代に於ける幾多の論客に共通のものとする可きなり。彼れと親交あり、彼れが思想の上に甚大なる感化を與へたりと稱せらるゝ當時の大哲 Thomas Hobbes が大著

Leviathan, or the Matter, Forme and Power of a Common-Wealth (一千六百五十一年初版)の第二部「國家論」第二十四章「國家の營養及び產生」に於て、國家の營養は第一に人生に資する物質の豊富なると、第二に其の消化即ち調製、並に第二に合宜なる傳通機關に由りて之を公用に致すに存するものなり、而して是れ等營養資料たる動、植、礦の物質は悉く神の賜物なりと雖も、其の或物は國內に存せざるを以て、國家は交易、又は正常なる戰爭、或は労働に由りて其の足らざる所を輸入せざる可らず。「即ち人間の労働も亦あらゆる他の物件と等しく有利に交易し得可き貨物なり、而して居住の用に供せらるゝもの以上に何等の領土なくして尙ほ克く存續するのみならず、而も亦、一部分は一地方より他の地方に至る貿易の労働に由り、而して一部分は諸資料を他の地方より誘入する工藝品の賣却に由りて其の權力を増大せる國家あるなり」(百二十七頁)と説き、Samuel Fortrey 亦、其の著 England's Interest and Improvement, consisting in the increase of the store and trade of this Kingdom. に於て自然の豐饒と人口とを以て繁榮の二大要件なりと看倣し、而して佛蘭西が如何に其の自然の富に由りて、又和蘭が如何に其の人民の勤勉に由りて繁榮を來したるかを示し、次で是に由

りて富裕にして、茲に所謂「富裕」なる語は貨物の夥多を意味するものにして、金銀財寶の蓄積を指すにあらざること、文脈より推して明かなり、且つ人口大なるは一國民をして強大ならしむるに先づ第一に必要なもの觀あり、而して、英國は此の二者に於て卓越せるが故に必然あらゆる他のものよりも最も強大且つ繁榮を得るに至る可きを豫期し得可しと説けり、此の書數版あり。初版は *Treatise of Taxes and Contributions* 刊行の翌年、即ち一千六百六十三年に現れたり。其の第二―三頁)。 Captain John Graunt の *Natural and Political Observations mentioned in a following Index, and made upon the Bills of Mortality* (本書は初め一千六百六十二年 John Graunt, citizen of London の署名を以て出版せられたるものなるが John Evelyn, John Aubrey, Edmund Halley, 及び Bishop Burnet 等が Petty を以て其の眞の著者と看做したるを以て、後の諸家の間に此の書の眞著者が Graunt なりや、Petty なりや、の問題を惹起したるが、恐らく本書は Graunt の手に成りしものなる可きも、然も兩者の交情密なりしより案ずるに Petty が本書の著者に對して些少ならざる影響を及ぼしたること事實なる可し。 *Political Science Quarterly*. 第十一卷、百〇五―三十二頁所載 Charles Henry Hull の *The Authorship of the*

*Natural and Political Observations upon the Bills of Mortality.* を参照す可し。 John Campbell は *Biographia Britannica* 第四卷、二千二百六十二―三頁に於て、Graunt の死後二年にして表れたる一千六百七十六年の増補新刊は Petty の監督の下に公せられたるものなりと云へり。) にも、偕て君主は常に土地が富の母にして子宮たるが如く、人は其の父なるが故に、其の人民の數に従ひて強大なるのみならず、又富裕たるものなるに由りて考ふるに、國家が結婚を奨励し、放逸を阻礙して以て神法を侮蔑及び冒瀆より保持すると等しく、彼れ等自己の利益を進捗する所以亦異とするに足らざるなり」と説けり(一千六百七十六年版、七十二頁)。十七世紀時代に於ける括弧は宛も引用符に同じきものにして、Petty 並に Graunt が共に以上の章句を括弧中に記入したるは單に斯くの如き思想のみならず、這般の比論を表明する形式も亦彼れ等より以前既に存在せるを談るものなり。一千七百〇二年 *Leipzig* に於て刊行せられたる、*Observations* の匿名の獨逸譯(譯者は Dr. Gottfried Schultz なり)は “weil, nach dem Sprichwort, die *hander der welt vater, und das land derselben mutter ist.*” と記せり。(Hull 編 *Economic Writings of Sir W. Petty* 第二卷三百七十八―九頁參照)。

由是觀之、人及び土地を以て國富の父母と做すの意見は Petty を以て始まりしにあらず、其の由來彼れよりも更に古きものあるを知る可く、彼れが創意は此の總念の案出にあらずして、寧ろ之に對する彼れが「政治算術」の適用に存するなり。彼れは經濟的目的の爲めには土地及び其の所産、並に貨幣、勞銀及び人口に關する徹底せる調査を必要とし、此の事にして行はるゝまでは、貿易は人の思索を用ゆ可く餘りに推測的の業なり」と主張し、彼の正しき骰子を取りて勝利を得んと欲するものが先づ其の把り方、振り加減、投げ具合及び雙陸盤の邊を打つ可き角度如何を考究するが爲めに長時間を費すに等しと做せり (Treatise of Taxes. 三十四頁)。 Petty が Thomas Mun, Josiah Child, Henry Robinson (England's Safety in Trade's Encrease. 一千六百四十二年版の著者) 等の亞流を汲むを以て満足せずして一般マーカントリストの範疇を脱し得たる所以是に存するなり。

Petty は Graunt が柴折りせる統計的研究の道を歩めり (前掲 Cunningham. 三百九十頁参照)。彼は其の Treatise of Taxes を公にするの前、彼の Graunt が Observations upon the Bills of Mortality を讀了せるとは明かなる事實なるも、彼れは其の第十頁及び二十七頁に於て此の書を引用せり、然も當時同書の暗示は未だ彼れの上に其の十分なる影響を及ぼすに至らざりしが故に、彼れが後年の著 Verbum Sapienti. に於て國富に對する鍵鑰と爲り、斯くて費用よりも遙に満足なる課税分配の基礎を與ふるに至りたる人民の數は唯だ瑣末なる點に於て (經費節減の問題に關する第六頁の所論) 偶然之を取扱へるに過ぎず。 Verbum Sapienti. は僅々二十四頁に過ぎざる小篇なるも、然も亦 Petty 研究者の看過す可らざる名著なり。本書は一千六百九十一年 Political Anatomy of Ireland. の附録として初めて出版せられたるものなるも、Fitzmaurice が Petty 傳の卷末に附せる Wycombe に於て發見せられたる Petty 自身の手書に成れる一千六百三十六年以後の其の書目には一千六百六十五年附を以て記されたり (同書三百十八頁)。本書の題號は大英博物館所藏の Political Arithmetick. の手寫本に附加せられたる手録は單に Verbum Sapienti. と記すのみなるも、上掲の書目には Verbum Sapienti and the value of People とあり、更に Dublin なる Public Record Office に保存せらるゝ Dr. Petty's Register. と稱する一卷中に存する手録に據るに、騰寫者の記せる表題は同じく Verbum Sapienti. のみなるも、同卷に附せる Petty が自筆の索引には Verbum Sapienti, Or a

discourse about Taxes & ye Value of People. と記せり。更に前記の版本には or an Account of the Wealth and Expences of England and the Method of raising Taxes in the most Equal manner. Shewing also, That the Nation can bear the charge of Four Millions per Annum, when the occasions of the Government require it. の副題を添へたり。

彼れは本書の緒言に於て課税の不公平なる事實を説明し、或る者は彼等が當然支拂ふ可く、又支拂ふを要する高の四倍を徴せられつゝあり、而して斯くの如き不權衡は租税の眞正なる禍患にして、而して租税が苛重且つ非常なる場合に際して痛切に感知せられざるを得ざる所なり。而して租税の負擔をして均衡を得せしむるが爲めには人民の増減、其の財富及び外國貿易に關する正確なる計算を備へざる可らずと做せり(同書第二頁)。是に由りてPettyは其の第一章に於て土地、家屋、船舶、家畜、貨幣及び多様の貨物の價值を個々に評價せんとせり(三一―三七頁)。今日に在りては固より這般の推定の基礎たる可き數字は更に正確なるものを更に充分に利用し得可きも、而も國富算定の近世的方法は未だ本質的にPettyのそれと異なる所大ならざるなり。(R. Giffen 著 The Growth of Capital. 一千八百八十九年版、七十

四―九十一頁を比較す可し)。然れども彼は本書の第二章に於て此の第一の算定に加ふるに、現代の統計が貨幣上の名價を以て標出すると極めて稀なる國富の一要素を以てせり。此の要素こそ彼れの所謂「人民の價值なるものなり」(Verbum Sapienti 七頁)。彼れは人民の稀少なるを以て眞の貧窮なりと思惟したり(Treatise of Taxes 十六頁)。人民は國富の父にして土地は其の母たるを以て、此の配偶の孰れと雖も國家經濟の棚卸しに際しては之を遺脱すること能はざるものなり。而して人民を以て土地に加算せんが爲めには彼れ等兩者をして共通なる價値の標準に歸せしめざる可らず。茲に至つて彼れが此の兩者間の方程式を作製せんとするの努力を生ずるなり。這般の意見は先づ「Treatise of Taxes.」に於て表示せられたり。曰く「吾人は土地及び勞働間の自然的等價を發見し、斯くて兩者を以てすると等しく、或は却つて之よりも善く兩者中の一方のみに依りて價値を表示し、而して吾人が片を磅に換算するが如く、容易に且つ正確に一方を他に換算するを得可しとせば満足なる可し」と(同書二十六頁)。而して更に彼れが後年の著「The Political Anatomy of Ireland. with the Establishment for that Kingdom when the late Duke of Ormond was Lord Lieutenant.

Taken from the Records, (一千六百六十七年より同七十三年夏に亘れる Petty が第二回の愛蘭土居住中の産物にして、其の死後に於て公にせられたる諸版本の外―拙稿貨幣問答を中心として觀たるサイ・キリアム・ベチイの貨幣論)上三田學會雜誌第十卷第六號參照―大英博物館は Petty より Southwell に傳へたる最良の手録を所藏せりに於て而してこは如何にして土地及び勞働の兩者中、其の孰れかの一方のみに由りてあらゆる物の價值を表明するが爲めに、此の兩者間の等價及び方程式を構成す可きやと謂へる政治經濟學上に於ける最も重要な考慮に吾人を誘ふなり。同書一千六百九十一年版、六十三―四頁との言を作さしめたり。蓋し「土地及び勞働間の等價及び方程式」を求むるの必要と困難とは常に彼れが此の課程を以て「政治經濟學上に於ける最も重要な考慮」と看做したる理論上の目的のみより來りたるものにあらずして、彼れが一千六百五十九年に至る約七ヶ年に亘れる第一次の愛蘭土居住に際し、恰も一千六百四十一年の同國叛亂の後、叛徒より沒收したる土地を一半は戰勝軍の兵士の間に、他は軍資金を貸出したる投機者の間に分配するに當り、沒收地の地位及び面積の測量は其の指揮者たる Benjamin Worsley の下に

最も不十分に且つ不合理に行はれつゝあるを主張し、直ちに自ら一層精確なる調査を行ふ可きを提言してより、其の分配の量定者として、又は委員としての經驗に由りて親しく感得したる所のものを本國に齎したるなり。

價值の共通の尺度として選定せられたるものは貨幣なるが故に、人民の貨幣價值を決定すること必要なり。然れども茲に所謂人間は賣らる可く、又買はる可きものにあらざるが故に彼れは一種の價值算定法に依頼せり。彼れは其の *Two Essays in Political Arithmetick, Concerning the People, Housing, Hospitals, &c. of London and Paris.*

(此の書は初め *Deux essays d'arithmetique politique, touchant les villes de Londres et Paris.* の題下に佛文を以て千六百八十六年に出版せられたるものなるが、此の佛文は同年七月十七日に免許せられたる英文化版よりの翻譯にして、原版よりも以前に發兌せられたるものなる可し)に於て Algier (Algier なる可し)に於ける奴隸の價格を利用したることあるも英文化版、十九頁、而もそは單に他の手段に據りて到達し得たる結果を支持するが爲めに外ならず。彼れが *Verbum Sapienti* に於て用ひたる算定法は下の如し。國民の資財、即ち富より年々生ずる所得は千五百萬に過ぎず、而して其の費用

は四千萬なりとせば、人民の勞働は其の餘の二千五百萬を提供せざる可らず。今若し人民の半數、即ち三百萬が日々七片<sup>ペンス</sup>を收得するものとし、其中五十二日の日曜日並に祭日、疾病、鬱散の如き時々、の休業の爲めに生ずる其の半數の休日を控除するものとすれば、毎年八磅六志八片(此の數字は正確ならざるが如し)上記 Public Record Office 所藏の寫本は八磅四志八片と記し、一千七百十九年版 Political Survey of Ireland. に添へたるものには八磅六志九片と作せり)の所得を收む可く、是に由りて前掲の二千五百萬を支出し得可し。是れ等三百萬の中、其の六分の一が一日二片、他の六分の一が四片、更に他の六分の一がそれ〴〵八片、十片及び十二片を得るものとせば、平均一日七片と爲る可し。千五百萬の所得を生ずるに過ぎざる國內の資財は二億五千萬の價値を有するが故に、二千五百萬の所得を生ずる人民は四億一千六百八十八萬餘の價値を有すること爲るなり。縱令、人類の各個は凡そ八ヶ年賦と看做さるるも、而も其の種族は元來永續不滅のものとして考ふ可きが故に、前記の額に對して賃貸せらる可き土地と等しき價値を有すと做すものは是なり(同書七—八頁)。Petty が這般の方式を適用したる數字は揣摩的のものにして、或は幻想的とさへ稱し得可きも、而も方式其の物は素と鞏固なるものにして、這般の巧妙なる

算定は彼が確然資本見積の問題を會得せるを證するなり。

斯くの如くして、國富を構成す可き諸要素を量定し得たる Petty は、進んで第三章に入りて國家の收支を對照し、更に前述せる量定を基礎として租税分配の方法を論じ(第四章)、最後に(第五章)貨幣及び國民經濟上必要なる其の高を述べたり(三田學會雜誌第十一卷第七號所載拙稿「ペチの貨幣論」下参照)。彼れは曾て富の *Realis for- malis* は數量よりも、寧ろ比例に於て存するものなるが故に、あらゆる人が其の財産の半ばを失ふも、彼れ等は今よりも貧窮たることなく、彼れ等が悉く其の財産を倍加するも、微塵、富裕の程度を増すことなかる可し、萬民悉く苦を受くるは、苦痛なきに等しと主張せり(Treatise of Taxes. 九頁並に十四頁)。而して彼れは今や諸般の租税は各所得の源泉を所有せる者の上に課せらる可く、而も彼れ等が全體の負擔に對して有する比率は彼れ等各自の所得が資本に見積られたる高の彼れの量定せる國富の總額に對して有する割合と等しかる可きことを企圖す可きを提言せるなり(前提版 Verbum Sapienti 十一—三頁参照)。(未完)